



役の行者・空海・西行・一遍・宗祇など

古来より多くの修行者たちが、旅に生き、旅に逝った。

奥羽・北陸を経て、美濃の大垣から伊勢へ――

西行歿後五百年に旅立った、芭蕉の『おくのほそ道』行  
もまた、命を賭した旅のひとつであったといえる。

捨聖たちの心の系譜をさかのぼりつつ『おくのほそ道』を読み  
解き、謎多き芭蕉の旅の真相に迫る。

## 竹下数馬

芭蕉文学の謎を解くカギは何か

# おくのほそ道の虚構と真実

二十一世紀図書館

『おくのほそ道』の虚構と真実

下数馬

短歌文庫

美田若

## 二十一世紀図書館

### 発刊のことは

二十一世紀を指呼の間に望みながらも、いよいよ混迷の度を深めつつある現代にあつて、何よりも求められているのは、新しい時代を力強く切り拓くための知恵と知識の共有であり、より高い識見の涵養ではないでしょうか。

私たちは、こうした時代の要請にいささかなりとも応えたいとの願いから、ここに『二十一世紀図書館』を創刊いたします。

本シリーズには、密度の高い、より確かなものを、読みやすく、わかりやすくをモットーに、現代的視点に立つて先人の英知を再発見・再認識する書をはじめ、さまざまな分野の最新研究成果を結晶させていきたいと思ひます。

PHP研究所

### 「おくのほそ道」の虚構と真実

芭蕉文学の謎を解くカギは何か

1986年10月6日 第1版第1刷発行

著 者——竹下数馬

発行者——江口克彦

発行所——PHP研究所

東京事務所 東京都千代田区三番町3番地10  
〒102 (03) 239-6221

京都本部 京都市南区西九条北ノ内町11  
〒601 (075) 681-4431

印刷所——大日本印刷株式会社  
製本所

© Kazuma Takesita 1986 Printed in Japan

ISBN4-569-21858-X 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

二十一世紀図書館

『おくのほそ道』の虚構と真実

下数馬

五  
女  
成  
林

若  
石

本文写真..著者摄影

## まえがき

芭蕉の代表作『おくのほそ道』は、元禄二年（一六八九）三月、江戸を出発、奥羽・北陸を経て美濃の大垣に出、そこから伊勢へ向かう六百里に及ぶ長い旅の文学である。

数え年四十六歳の芭蕉に同行した五歳年下の曾良そらは、そのときの日記、いわゆる『随行日記』（曾良旅日記）を残した。この曾良『随行日記』（岩波文庫・角川文庫に収められている）は長く人々の目に触れることがなかったようであるが、昭和十八年七月、山本六丁子氏によって翻刻され、にわかに注目を浴びるようになった。『おくのほそ道』の研究が飛躍的に進歩するようになったのはこのときからである。『おくのほそ道』の虚構性の問題などもようやく明確になった。

しかしながら、芭蕉がこの作品で何を語りかけ、何を訴えようとしたかについては、今日でも必ずしもはっきりしているとは言えない。

芭蕉は元禄七年（一六九四）十月十二日、旅の途次、大阪の客舎において数え年五十一歳で死ぬのだが、この『おくのほそ道』には異常な関心を寄せ、晩年まで推敲をおこたらなかったと伝えられている。

芭蕉がいのかを掛けて書いた『おくのほそ道』とはいったいいかなる作品であるのか。

私は、『おくのほそ道』は冥界めぐりの文学であり、彼の世界観・人生観が述べられた一種の曼陀羅まんだらであると見たい。

わが国の聖地・靈山には独得の曼陀羅が伝えられてきた。かつては、それらの曼陀羅の絵解きをする御師・聖・唱導師ひじりたちが活躍して、民衆を教化し楽しませてくれた。

『おくのほそ道』は芭蕉が文と句でつづった心象曼陀羅である。言葉をかえて言えば、この芭蕉曼陀羅の絵解きの文に相当するのが『おくのほそ道』である、と考えるのである。

このような立場にたって論じたこの本の論説は、従来の芭蕉学者たちの見解とかなり異なるところがあるかも知れない。

「歩く文学」でもある『おくのほそ道』を研究するには、自らもまた「歩く」ことから始めなければならぬ、というのが私の一貫した主張である。歩いては考え、考えては歩くのである。

私は芭蕉の歩いた所をくり返し歩いてみた。そのうち次第に、私自身の芭蕉観、『おくのほそ道』観が生まれてきたのである。

この本で説くところのものは、私のこうした体験と思索にもとづくものにほかならない。

なお、この本に用いた『おくのほそ道』の本文は、杉浦正一郎校註の岩波文庫本に拠った。俳画は蕪村の『奥の細道画卷』（逸翁美術館蔵・重要文化財）の中から採用することにした。

「おくのほそ道」の虚構と真実※目次

まえがき

I 百六十日、六百里の旅——旅と芭蕉と日本人

1 西行歿後五百年 15

三度の大きな旅 西行をめぐる漂泊者 聖としての旅

2 百代の過客 20

「月」は太陰、「日」は太陽 「年」は永遠に循環する

3 伊勢へ、新生の旅へ 24

二見浦は禊の場 擬死再生の象徴

## Ⅱ 出立から出生へ——『おくのほそ道』の謎を解く

1 なぜ「おくのほそ道」への旅なのか 「ひなの家」 31

詩と真実 「ひな」とは何か 二十日は旅立ちの適日

2 現世から冥界へ 「旅立ち」 38

「幻のちまた」との別れ 「再生」への祈り

3 捨聖と増賀上人 「草 加」 43

無一物でないことへの負い目 イデタチではなくデタチ

4 「死と再生」の表明 「室の八嶋」 49

重大な暗示 「同行」とは修行の道連れ

5 佛五左衛門 「佛五左衛門・日光」 54

卯月朔日 西行六十九歳の春 観音の化身

6 「夏山」と夏峯 「那須・黒羽」 65

またも観音の化身 なぜ「夏山」か

7 「田一枚」と柳の精 〔雲岩寺・殺生石・遊行柳〕 74

「田一枚」の謎 観音にまつわるドラマの展開

8 白河の関越え 〔白河の関〕 77

奥州路への第一関門

9 芭蕉の見た文芸の起源 〔須賀川〕 80

田植歌に風流を見る 一人の隠者 修験道最大の秘法

10 芭蕉と佐藤親子 〔あさか沼・しのぶの里・佐藤庄司の旧跡〕 87

「しのぶもち摺」 鎮魂の祈り

11 捨身無常の観念 〔飯塚〕 92

またも『撰集抄』 持病さへおこりて

12 加右衛門の草鞋 〔笠嶋・武隈・宮城野〕 97

かた見の薄 武隈の松 さればこそ風流の……

13 壺碑と大伴家持 〔壺の碑・末の松山・塩釜〕 103

古人の心 〔勇義忠孝〕の物語

- 14 松島と見仏上人 [松島・瑞巖寺] 110  
 念願の地に 真如の月
- 15 奥州修験と義経 [平 泉] 116  
 山岳宗教の一大聖地 義経ゆかりの地
- 16 山刀伐峠 [尿前の関・尾花沢] 124  
 苦しい峠越え 富めるものなれど……
- 17 山上山下巡礼 [立石寺・最上川] 128  
 祖霊への供養の形 白糸の滝と仙人堂
- 18 修験の山 [出羽三山] 134  
 羽黒派の大本山 月山の二つの秘境 不思議な御神体
- 19 美女と芭蕉と洞窟と [酒田・象潟] 143  
 「粥を望」み一眠り 九十九島八十八瀉
- 20 「佐渡によこたふ」 [越後路] 150  
 銀河の祭り 哀切きわまらない物語 ふしぎの名鐘あり

21 遊女の伊勢詣で [市 振] 160

伊勢をめざす 花に清香、月に陰

22 老武者の最期 [那古の浦・金沢・太田神社] 167

万葉歌人・大伴家持 悲しみの句

23 乾坤無住、同行二人 [那谷・山中] 172

山中温泉から那谷へ 曾良との別れ

24 等栽の妻と光秀の妻 [全昌寺・汐越の松・天竜寺・永平寺・福井] 176

汐越の松 月さびよ

25 遊行の旅 [敦賀・種の浜] 183

遊行とあそび 西行への追慕

26 再び新生の旅へ [大 垣] 189

消えた二十日間 通過儀礼としての旅



『おくのほそ道』地図





I  
百六十日、六百里の旅  
——旅と芭蕉と日本人



